

論文

## 小学校低学年の音楽的発達を促す指導法の考察 —楽器遊びと身体動作に着目して—

安藤 江里

Musical Development and Teaching Methods in the Lower Grades of Elementary School:  
Focusing on Musical Plays and Body Movement

ANDO Eri

### 要 旨

本論では人間が音や音楽と関わりながらどのように成長していくのか、身体的発達と音楽的発達の関係を先行研究から整理し検討していく過程で、楽器遊びと身体動作に着目した。低学年の児童の特性を鑑みても音楽と遊びと身体は切っても切れない関係であり、音楽教育の在り方を考える上で大事な視点となる。教科書や指導書の内容からもほぼ好ましい活動が読み取れたが、器楽学習の在り方については技能習得に関する課題を挙げ、低学年に位置付けられたリズム打楽器や鍵盤ハーモニカ等の歴史的背景と児童の発達面を踏まえて検討した。その上で楽器遊びと動作の特性からより低学年の児童の音楽的発達を促すと思われる楽器の有用性と活動例を提示し考察を加えた。

### キーワード

低学年の音楽教育    音楽的発達    楽器遊び    身体動作

### 目 次

- I. はじめに
- II. 音楽的発達における遊びと身体性
- III. 低学年児童の特性と学習内容について
- IV. 器楽学習に有効な楽器導入の提案と指導法の考察
- V. まとめ

注

文献

## I. はじめに

### 1. 問題の所在

小学校教育における音楽は教科としての授業だけでなく学級活動や音楽会などの学校行事をはじめ多岐にわたる活動が考えられる。とりわけ低学年においては幼児期からの接続という意味で大事な時期であり、それまでの遊びを通して育まれてきたことが円滑に接続されるよう生活科を中心とした合科的・関連的な指導が望まれている。故に音楽遊びを取り入れることは有意義であり、児童の発達段階に応じた音楽活動や指導の在り方を考える必要があろう。

筆者は保育者養成及び小学校教員養成に長く携わる中で、音楽の専門外の保育者や教師に委ねられているこの大事な幼児期と低学年児童期の音楽表現教育の在り方について様々な課題を感じている。保育では手遊びやわらべうた遊びを取り入れたり保育者がピアノを弾いて歌ったり踊ったりする活動がよく見られるが、なかなか生活の中の音や身近な物の音に耳を澄ませて関わりながら表現する活動は少なく、楽器については環境が整っていないことも多い。また小学校低学年においては音楽専科ではなくクラス担任が授業を担当する場合に、苦手意識を持っている先生方も多いため十分な指導が行き渡っているとは言い難い。歌唱やリズム活動ではCDなどの教具を用いて児童と一緒に歌ったり動いたりすることである程度成り立つが、自ら何か楽器を演奏したりすることは少ないであろう。基本的な音楽の知識、技能もさることながら、保育者には子どもの発達段階を理解した上での音楽表現を受け止め伸ばすだけの力量が必要であり、低学年担任には幼小接続の視点も鑑みて、音楽の授業や常時活動など児童の発達段階により好ましい環境設定と実践力が必要である。また幼児教育における保育内容領域「表現」としての意図が小学校低学年の教師にどれだけ浸透し

ているかは甚だ疑問である。そのために教員養成における低学年の指導法には重点を置いて、幼児期からの発達を踏まえた子どもの音楽的発達を理解し具体的な内容や指導法を提示していく必要があると考える。また現職教員の研修や研究授業においても子どもの音楽的発達に適した内容と教材、指導法を常に検証していく必要がある。

これまで幼児の音楽表現に関する研究は幼児教育や発達心理学の面からも非常に多く、また学校教育における音楽科教育に関する研究もそれぞれの校種や内容面を中心にされている。しかし幼保小連携や接続の視点からの研究はまだ少なく、その重要性から様々な取り組みが行われてはいるが、実際の接続には様々な困難も生じている。幼児期の遊びを活かした音楽表現活動をどのように小学校につなぎ発展させていったらよいだろうか。

小学校に入学すると歌唱活動に加えて、器楽学習が本格的に始まり、旋律楽器の鍵盤ハーモニカをはじめとしてタンバリンやカスタネットなどのリズム打楽器が主に扱われている。この器楽学習は楽器の開発とともに戦後急速に発展し、音楽会や発表に向けて合奏として成立させるための一斉指導が行われ、演奏技能の習得に偏りがちな危険性を孕んでいる。演奏技能の習得も必要ではあるのだが、低学年においては接続期である児童ならではの音遊びや楽器遊びの音楽表現も大切にしたい時期である。それは授業場面だけではなく生活の中のちょっとした場面でもできる環境設定が重要であり、子どもの感性を豊かにし聴く耳を育てることにもつながる。

以上の観点から、本研究では低学年の音楽指導の在り方について検討することとし、幼児期の身体的発達と音楽的発達からその特性として楽器遊びにおける身体動作に着目した。そして幼児期から小学校低学年の児童の音楽的発達の特性を連続的に捉えた時、幼児の音楽表現を音楽科の学習内容にどう発展させつなげるのか、とりわけ器楽学習における課題を挙げて筆者の実践や経験からよ

り好ましい楽器も提案しながら再考したい。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、幼児期の発達における楽器遊びと身体動作の観点から小学校低学年の音楽教育の在り方について検討し、とりわけ器楽学習の現状と課題を踏まえて音楽的発達を促すより好ましい楽器の提案と音楽指導について考察することである。

## 3. 研究の方法

まず子どもの発達と音との関わりや音楽的行為について概観し、身体的発達の側面を中心に先行研究を参考に整理しながら子どもの生活に根ざした音遊び・楽器遊びにおける音楽表現行動の実態を捉える。そこから幼児期の特徴的な音楽表現に見られる身体動作を抽出する。

次に「平成29年告示小学校学習指導要領解説音楽編」から低学年の児童の発達の特性と身体性に関わる記述を整理し、さらに低学年の音楽科の教科書及び指導書の具体的な学習内容と照らし合わせ、発達に即した音楽教育の在り方を検討する。とりわけ器楽学習については楽器導入の歴史的背景と指導の現状及び課題を挙げて考察する。

そして幼小接続の視点を踏まえ、先に抽出した幼児期の楽器遊びと身体動作による音楽表現活動を低学年の学習につなげて発展させ、音楽的発達を促すために有用と思われる楽器導入の提案と具体的な指導法について考察する。

# Ⅱ. 音楽的発達における遊びと身体性

## 1. 人間の発達と音との関わり

ここでは胎児から乳児における心身の発達と音との関わりを主に見ていく。人間は生まれる前の胎生期から音と関わっている。まだはっきりしない面や諸説あるが、だいたい7ヶ月までには聴覚器官が出来上がっており、音を音として認識するのは8ヶ月頃からと言われている<sup>1)</sup>。実際は心音や脈拍、血流音が混ざった「胎内音」環境の中で羊水を通して振動が伝わり、生まれてからこの「胎内音」を聞かせると泣いている赤ちゃんが心地よいと感じて泣き止み寝る、という現象が確認されている<sup>2)</sup>。また胎児が外からの音や話しかける声に反応して動くことも妊婦のほとんどが経験しているであろう。

生後、産声とともにいよいよ自らの身体と音との関わりが始まる。始めは呼吸に伴う反射的な声や泣き声を出す、生後8週頃にはクーイングと呼ばれる母音を中心とした「アー」とか「ウー」といった声を出し、舌を出したり唇を動かしたりして様々な声を出して遊ぶようになる(ヴォーカルプレイ)。7ヶ月頃には「バーバー」や「マンマ」などのいわゆる基準喃語が出始め、手を上下に動かしながら声を出すなど身体の動きとの関連も指摘されている<sup>2)</sup>。

一方母親や養育者は少し高めの優しい抑揚に富んだ話し方「母親語(マザリーズ)」を無意識にしており、乳児もこれを好み反応する。生後11週から12週で人間の声とそれ以外の声を聞き分け、生後14週には人間の声の中でも母親の声の特徴を聞き分けていることがわかっている<sup>1)</sup>。丁度首が座る頃、声やオルゴールなど気に入った音のする方向に目を向けたり顔を向けたりする行動である。また母親や養育者の顔をよく見て口を動かしたり声に反応して自分も出そうとしたり、母親が歌を

歌うと笑顔になって手足もバタバタ動かしたりして反応する姿が見られる。このように発達とともにまわりの様々な声や音、音楽に全身で反応し関わっている。

1歳になる頃までには後に歌うことにつながるような音声が自発的に出てくる発声遊びをするようになり、母親や養育者の歌に聴き入ったり一緒に手をつないでリズムに合わせて振ったり身体を揺らしながらその心地よさを経験していく。また音の出るおもちゃにも興味を示して握ったり近づいて触ろうとする。ハイハイから立って歩けるようになるとさらに行動範囲も広がり、散歩などで様々な動物の鳴き声や乗り物の音に出会ったり、水の流れる音や風が吹く音など自然の音にも触れ、「ワンワン」「ニャーニャー」「ジャージャー」「カンカン」「プープー」などのオノマトペを好んでおしゃべりする。1歳の頃に見られる身体反応の特徴としては見たものや聴こえる音、音楽に無意識に反応し体をバウンドさせる動きが挙げられる。

2歳頃には自分で勝手に歌う自発ソングが快感情とともに生まれ、言語の獲得とともに断片的な歌詞を再現して歌をまねすることができるようになっていく。音程はまだ定まらないが3歳に向けて次第に音階に当てはまっていく。歌いながら体を動かしてはねたり跳んだり踊ったり、時には身体動作を伴って動物になって鳴き声をまねしたり乗り物の音を出したりする。また音遊びとして生活に根ざした水の出る音や料理をする音などごっこ遊びでも音と関わりながら様々な事象や意味を関連付けて知覚感受している。身の回りの玩具や絵本、具象物でも握って振るだけでなく手でたたいたりボタンを指で押すと音が鳴るものに興味あり、五感で受け止め自分がイメージした音と動きを身体全体で表現しようとするのだ。誕生から約3年間で聴覚、視覚などの感覚器と手足の運動器の発達とともに音楽的発達の基礎となる感性を育んでいる。

## 2. 幼児期の発達と音遊びにおける身体動作

乳児の発達における音や音楽への関わりは母親の声や歌と身の回りの音や音楽に対しての音声的反応と模倣が中心であったが、次の段階として幼児期における音楽との関わりにおいてはその発達の特性を「遊び」と「動作性」に注目して論じていく。幼児期はほとんどの子どもが家庭以外の幼稚園、保育所、こども園などに通っており、就学前の集団生活においては様々な音環境の中で遊びを通じた活動が行われている。ここで「遊び」について触れておく。

### 1)「遊び」の定義

「遊び」に関する先行研究においては遊び論で有名なホイジンガが「遊びとは、あるはっきり定められた時間、空間の範囲内で行われる自発的な行為もしくは活動である。(中略)遊びの目的は行為そのものの中にある。それは緊張と歓びの感情を伴い、またこれは『日常生活』とは『別のものだ』という意識に裏付けられている。」<sup>3)</sup>と定義している。これを踏まえ小川は次のように定義した。「第1に遊びは遊び手が自ら選んで取り組む活動である。これを遊びの自発性とよんでおく。第2には遊び手が他の目的のためにやる活動ではなく、遊ぶこと自体が目的となる活動である。第3に、その活動自体、楽しいとか喜びという感情に結びつく活動であろうということである。第4に遊びは自ら進んでその活動に参加しなければ、味わうことができないということである。」<sup>4)</sup>カイヨワも同様に遊びについての特徴を挙げ、遊びの構造や質から大きく4つに分類し、それぞれにおいて遊戯性から競技性の度合いをさらに細かく分類している<sup>5)</sup>。

またピアジェは発達と遊びの関係を次のように述べている<sup>6)</sup>。抜粋してまとめる。

①乳児期の遊びは「機能の遊び」又は、「単なる実践の遊び」と言われる。人やものの外界とのやり



取りをし、つかめるようになったり、すわれるようになったり、たてるようになったり、あるけるようになったり、できないことが、できるようになっていく過程である。この過程では、それら機能を使い、できること自体が楽しくて、またそれら機能を使っている感覚(内臓や筋肉の感覚)自体が、心地よくて、その機能を繰り返し行って遊び、自分の体の働きを楽しんでいる。繰り返し機能を使って、その機能がうまく使えるようになっていく。

②幼児期の遊びは「象徴の遊び」と言う。ごっこ、模倣、想像、虚構を通した遊びである。例えば、葉っぱをお皿に象徴して遊んだり、学校ごっこ、おままごとなどのごっこ遊びをする。一人遊びであったものが、並行遊びとなり、役割遊びとなっていく、象徴を共有し、他人との関係作りを行っていく。

③児童期の遊びは「ルールのある遊び」である。もう一つは「構成遊び」である。(以下略)

④思春期・青年期の遊びはこれまでの時期の遊びからは脱皮し、スポーツ活動、文化活動を「趣味」として楽しむようになる。

以上のように「遊び」は自発的に取り組みそれ自体を目的とし、楽しく喜びを感じるものであり、幼児にとっては生活の中心となるものである。

## 2) 遊びの教育的意義

時代の変遷とともにとりわけ伝承性の強い遊びが失われつつある中で、平成12年度施行の幼稚園教育要領では「遊び」を中心とする教育を基本とすることが確認された。小学校教育においても特に低学年で「遊び」の教授が導入され遊びを通して学習が行われている。小川は本来子どもの生活における「遊び」の伝承による教育機能と近代学校の本来の機能(教授)との異質性を強調しており<sup>7)</sup>、また「遊び」の本来の目的はその行為そのものであるにも関わらず、何かのために遊びを取り上げることは遊びの本義ではないことも指摘している<sup>4)</sup>。

では幼児の遊びの教育的意義とは何か。幼児の遊びの教育的意義について小川は、幼児一人ひと

り、そして幼児集団の自己形成力を創出し、他者の動きに注目する注視行動から動機形成が始まり試行錯誤に至る観察学習の過程は自己学習の過程である、と述べている<sup>7)</sup>。

さらに石出は「遊び」と「学習」の関係を検討し、自己目的性を持つ「遊び」が、子どもの「内発的動機」という形で大人(教育者)の眼差しのもとに置かれるとき、「遊び」は「学習」の手段となる、と述べている<sup>8)</sup>。ごっこ遊びにおいては想像性や創造力の形成に、また集団遊びにおいては社会性や道徳性等の発達に貢献し得ることは容易に考えられる。従って「遊び」には子どもにとっては無意識な行為でも結果的に学習過程における手段となり得る教育的意義が含まれていると考えられる。

## 3) 音遊びにおける動作性と身体

次に幼児の音楽的行為における動作性と身体について考える。ここでいう音楽的行為とは模倣して声を発することも含めた歌うことにつながる行為や、音の出る玩具や身近なモノの音を探って鳴らそうとする行為、そして音を聴いたり音楽に聴き入ったりする時に反応して身体を動かす行為などを含んでいる。そこから音遊びにおける動作性の抽出を試みる。

古川は子どもの発達過程と音楽的成長の過程を自身の実践から結びつけて段階的に示し、特に音遊びから楽器遊びへの環境設定や指導法について述べている<sup>9)</sup>。乳児期については前項でも言及しているが、ここでは発達段階と音遊び・楽器遊びの動作性に焦点を当てて整理していく(以下下線は筆者)。首が座わり物を握ることができるようになる頃に音の出る玩具を持たせると振り回して楽しむ。座ることができたなら振る活動に加えて叩く活動ができるようになる。玩具だけでなく容器やテーブル、お椀など日常生活の様々な物が音を出す対象となる。1~2歳になると身近な物や楽器を振ったり叩いたりして物(楽器)によって出る音が違うことを発見し、色々な打ち方をするなど音遊びをして探求することで音や音楽に対する創造

力を養うことにつながる。その際物的・状況的環境を整えると共に模倣のための音・音楽で子どもに働きかける人的環境も必要になる。

次に幼児期について見ていく。3歳になると自己中心性が強く自分の気に入った物に固執するなど集団でいても一人ひとりの活動であり一緒に歌う意識はまだうすいが、保育者の手遊び歌や全身を使った体遊びを真似しながら楽しむ。家庭や園で鈴や太鼓など様々な楽器にも触れていて音楽に合わせて簡単なリズム打ちができるようになり、歌のリズムに合わせて順番に打つような楽器遊びに発展させることができる。4歳児では音楽的成長が著しくなり、歌詞の内容を理解しリズムや音程も正確になり曲の雰囲気や表現して歌えるようになる。また身体の運動機能も増し楽器を持ってリズムカルに打ったり強弱のコントロールや音色の変化にも気づく。そして友達と一緒に歌ったり楽器を打ったりする楽しさがわかるようになり、集団でも合奏や分奏ができるようになる。5～6歳になると心身の発達や手足の運動能力の発達により音楽に合わせて拍子を打つことができ、旋律楽器の演奏も可能になる。社会性も育ち目的に向かってみんなで一緒に歌ったり合奏することを楽しみ、役割分担をして音楽経験の度合いを深めることで楽器遊びから音楽表現活動へ高めることが可能になる。単なる遊びを音楽的な表現活動にするにはやはり楽器などの物的環境と子どもへの適切な働きかけを行う人的環境が重要である。

また村上は身体的な動きが伴った音遊びに焦点を当て、幼稚園での遊びの場における子どもの表現の変容について事例を挙げている<sup>10)</sup>。一度鳴らすと衰退していくミュージックベルの音に触発されて次に鳴らすタイミングを計るようにゆっくり腕を上げ二人の子どもが掛け合いをしていると次第に速くなっていく事例。また2本のミュージックベルのうち一音鳴らすと同時に左足を着地させ、音の衰退と合わせるようにゆっくり右足を上げ、着地とともにもう一方のベルを鳴らす事例。音の

関係性のイメージをゆっくりと滑らかな身体の動きを伴って表現しているが、他者との掛け合いによって共鳴していく姿と言えよう。他にもウッドブロックや太鼓で遊ぶ複数の子どもが一見秩序なく思うままに叩いているが、合図による沈黙の場面ではピタッと身体を止めて緊張感を共有し、次の叩くタイミングをうかがうような姿も紹介している。いずれも子どもは音遊びをしながら物(楽器)を操作する動作性(振る・叩くなど)だけではなく音が鳴り続けている時間的な感覚や音が止んだ状態を身体的な感覚と連動(ゆっくり足を上げる、動かない等)させていることがわかる。

以上から就学前の子どもの身体的発達と音楽的行為には深い関連性があることがわかる。歌うこと自体も息を吸ったり吐いたりしながらコントロールして声の出し方や響かせ方を試すなど自分自身の身体と対峙し、音や音楽をよく聴いてその雰囲気やイメージを身体全体で表現しようとする。また楽器演奏の行為は身近な物の音や楽器の音遊びの動作性と関連していることも明らかである。

これまでの音楽的行為に結びつく動作性を抽出すると、歌うことに結びつく動作としては息を吸ったり吐いたりすることに伴って首を動かす、口や舌を動かす、声を出す、などが挙げられよう。歌いながら手を叩いたり腕を動かしたり体をバウンドさせる動作も付随する。身近な物の音遊びや楽器遊びから楽器演奏に結びつく動作としては握る、振る、叩く、打つ、投げる又は転がす、触る、押す、こする、吹くなどが挙げられる。音楽を聴いてリズムや曲想を感じてイメージを全身で表現する行為には、手拍子、足踏み、立つ、座る、這う、歩く、走る、飛ぶ、回る、踊る、腕や足を大きく動かす、止まって動かないなど、子どもが表現する動作は計り知れない。さらに園でよく行われる手遊び歌、指遊び歌、わらべうた遊びも発達に応じて数多くあり、様々な動作を伴って人は身体全体で音や音楽と関わりながら成長していくことがわかる。

### 3. 幼児期以降の音楽的発達特性

遊びを中心として様々な音や音楽に身体全体で関わってきた幼児が小学校に入学するとその音楽的発達はどのように変化していくのだろうか。心身ともに力強く成長し、運動機能や指先の器用さも増し、また社会性や協調性も育ち互いを聴き合うこともできるようになるだろう。しかし幼児期から児童期への接続期<sup>注2</sup>、いわゆる年長児後半から就学後1学期を含め低学年の間は、幼児期の遊びを中心とした生活から小学校の学びへどうつなげて発展させるかが重要となる。保幼小接続の問題についてはここでは深く論じないが、日本の教義務教育である就学年齢は6歳であり、この6歳が妥当かは別として、発達特性から世界的には幼児期は8歳頃までと捉えられている説もあり<sup>注3</sup>、低学年の指導においてはその発達の特性を踏まえたカリキュラム編成と教育方法を模索していく必要がある。

#### 1) 音楽的発達と遊びの概念

英国を代表する音楽教育学者キース・スワンウィックは、子どもの作品や行動観察から音楽的発達の道筋を心理学的な観点からとらえ、以下のような図でピアジェの遊びの心理学的概念を用いて音楽的要素との関係を示し、説明している<sup>11)</sup>。

そこでは大まかな音楽的発達の道筋を〈マスターリー〉〈模倣〉〈想像的な遊び〉という順であること

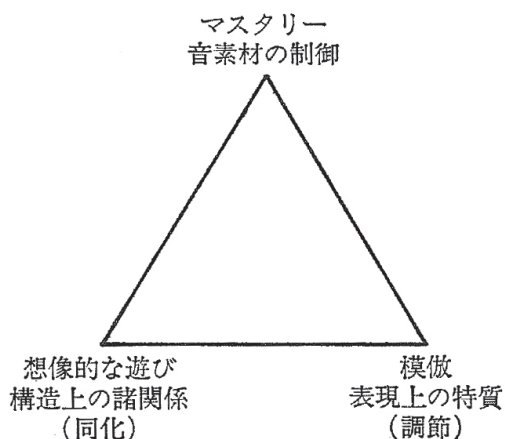


図1. 遊びと音楽の3要素

を述べている。「名人になれて何でもできる」という絶対的な喜びをもたらす〈マスターリー〉は音楽的行動にも影響を及ぼし、声や楽器の操作、演奏技能の発達など音楽的素材の制御と関連する。遊びにおける重要な要素である〈模倣〉は何かになったふりをして外界の事物や人、出来事の特徴に自分自身を似せて調節する。このとは表現上の特質を持ち、共感したり感情移入しながら演じること、また音楽を鑑賞して味わうことは音楽の感情の特質にこれらの調節が内面的に行われることと関連する。遊びはやがて想像的になり自分の周りの世界が変形されて虚構の世界が子どもの中に同化される。この〈想像的な遊び〉は自分固有の何か新しいものを創り上げることであり、音楽的な構造の再構成ともいえよう。

さらにスワンウィックは幼児期以後の音楽的発達についても触れており、〈想像的な遊び〉は音楽的思索から慣用的語法が取り入れられ、思考の過程と感情の過程を自己意識する〈メタ認知〉へと変容して価値付けられていくことが述べられ、ティルマンとの論文<sup>注4</sup>から以下の図を引用し音楽的発

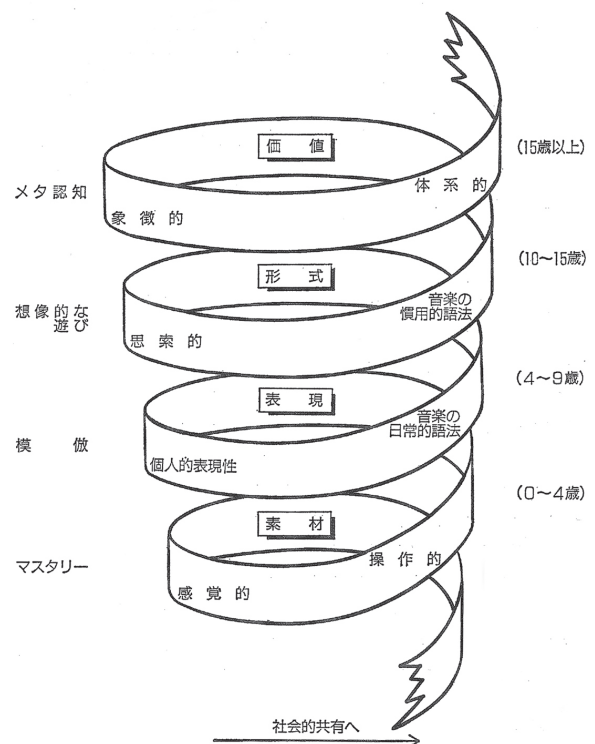


図2. 音楽的発達の螺旋図



達の螺旋状過程を示している。

この図において左側にあるのは感覚的な楽しみ、音の探求、個人的表現性、思索的な想像力など個人の創造性を強調するものであり、右側には操作的、技術的な能力、音楽の慣用的語法として様式的な確実性を重視するものである。音楽的発達はこの両者の相互作用によって解釈されるべきものであり、音楽教育に携わる者として意識していかなければならない点である。前述書による彼の言葉を引用すると「低学年および就学前の時期においては、感覚的な探求と限られた操作上の制御を促進させることが主たるねらいである。小学校においては、このことはさらに推し進められ、音楽の模倣的な要素が、おそらく我々の仕事の中心的なものとして、より明確に焦点化されることもある。そして、その模倣的な要素は、個人的な表現や音の探求に根ざしており、音楽の日常的語法の技能を獲得することに移行している。この学習は、表現性を増進したり鼓舞したり強化することに役立つ視覚的なイメージと関係づけることができるので、動きや舞踏と統合することができる。すべての音楽の形式が対比と反復に依存していることや、意外さが音楽的な構成にとって決定的であるということを理解するためには、10歳くらいまでの音楽の思索的な所産とその認知に対して、我々はもっと目を向けるべきである。」<sup>11)</sup>とある。幼児期以降の低学年の児童の音楽的発達を考える時、やはり遊びにおける模倣が中心となり身体動作と関連させながら音楽の基本的な反復パターンを浸み込ませ、次のステップを見据えつつも急がずじっくり行われるべきであろう。

## 2) 実践研究

幼児期からの接続を意識した低学年の音楽的発達を促す実践例としては、まず岩手県立総合教育センターによる研究報告が挙げられる<sup>12)</sup>。そこでは幼稚園と小学校低学年における音楽的発達を促す指導・援助の在り方についての基本的な考え方が示されており、この時期の子どもの音楽的発達

の特性は、やはり遊びが生活の中心となり音楽においても遊びの対象となり、音楽的刺激に全身で反応したりなりきって表現したり真似をして自分もやってみようと探求することである。そのような発達を促すための活動段階を「であう」「かんじる」「あらわす」「たのしむ」とし、リズム遊びや歌遊び、音遊び、言葉に着目した表現遊び、イメージを広げる造形遊びや音づくりなど楽曲と関わる遊びを取り入れた実践を行っている。音楽活動に遊びを取り入れることは接続期の発達の特性を生かしたものであり、興味・関心を高め創造性を育てることに有意義であることが述べられている。

またお茶の水女子大学附属小学校の低学年教育を考える部会では、スタートカリキュラムを単に小1プロブレムの解消のためではなく、低学年全体へ拡大し連続性を確保する考え方で、生活に根ざした領域による学びから探求的な学びである各教科への段階的な移行を示している<sup>13)</sup>。音楽科の元教諭であった猶原は、「ミュージッキング」<sup>注5)</sup>や「音楽する身体」<sup>注6)</sup>という概念をベースに、低学年の実践においては毎時間の常時活動としてリクエストによる歌唱活動と、わらべうた遊びを実践していた。教師が教え込んで演奏としての完成度を求めるのではなく、自分で選んだ曲や友達が選んだ様々な曲と出会い、共に感じ共鳴していく姿や、身体丸ごとわらべたで遊ぶ中からコミュニケーションが生まれ、ぶつかりながらも折り合いをつけ身体が共振していく過程を大切にしていた。

その他にも低学年の音楽教育において遊びや体を動かす活動を取り入れた実践は多く見られる。ここまで先行研究の理論をよりどころに、人間が生まれてから広い意味での保幼小接続期(低学年を含む)までの音楽的発達と関連する遊びや身体動作について述べてきた。また実践例からも低学年の音楽教育における遊びと身体の関係は根付いていることが明らかであった。



### Ⅲ. 低学年児童の特性と学習内容について

次に日本の学校教育における低学年の児童の発達の捉えと音楽科の具体的な学習内容について見ていく。

#### 1. 学習指導要領における低学年児童の特性

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進する第9次学習指導要領が告示された。今回は道徳の特別教科化や外国語活動が中学年に移行し高学年においては教科化されるなどの改訂が行われたが、低学年に関連するところでは幼稚園教育要領の改訂に伴い、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の明確化と小学校入学当初における生活科を中心としたスタートカリキュラムの充実が謳われ、これまで以上に幼児期の教育と小学校教育との円滑な接続の重要性が高まり共通理解を促している。

音楽科の内容構成は従前どおり「A表現」領域として歌唱、器楽、音楽づくりの3分野が含まれ、「B鑑賞」領域との2つの領域から成り、学習指導要領では領域、分野ごとに目標や内容が記載されている。現在移行期ではあるが、ここでは「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽編」より、領域の内容ごとに低学年の児童の発達上の特性に関する記述<sup>14)</sup>と学習指導要領からも内容の取扱いなど低学年の特性に関連して配慮すること、さらに身体性に関わる記述を抜粋する。その上で好ましい活動内容及び指導上の留意点について考察を加える。

##### 1) 歌唱

「低学年の児童は、歌うことが好きで、模倣して歌ったり歌詞の表す情景や場面を想像して歌ったりする傾向が見られる。また、低学年の児童にとって、曲想を感じ取ることと意思を持つことは一体的で

あることが多い。」

「低学年の児童は、体の動きを伴いながら曲の雰囲気などを楽しんで歌ったり、歌詞に登場する人物や動物になりきって歌ったりする傾向が見られる。」

「低学年の児童は、楽しんで模倣しようとする傾向が見られる。一方、リズムや音程が不確かだったり、一定の速度を保てなかったりする傾向も見られる。」

「低学年の児童は、自己表現の意欲が強く、自分の声を精一杯出して歌おうとする傾向が見られる。また、自分の歌声や友達の歌声に関心を持ち、魅力のある歌声に接すると、自分でもそのような歌声で歌ってみたいという意欲が芽生えてくる時期でもある。」

「低学年の児童は、友達と一緒に歌う活動に意欲的な傾向が見られる。一方、必要以上に大きな声で自己主張の強い歌い方をしてしまい、声を合わせて歌うことに意識が向かない傾向も見られる。」

以上から歌唱表現の活動においては、友達と一緒に歌うことや模倣することが好きで、体の動きを伴いながら登場する物になりきり、歌詞の表す場面を感じ取って思いっきり自己表現しようとする児童の姿がわかる。また実技面においてはリズムや音程、テンポの維持は不確かであり、他者と声を合わせることに意識が向かない子もいるが、魅力的な歌声には関心を持ち真似して歌ってみようとするのである。従って低学年の児童に好ましい活動には、まず歌う喜びや楽しさを味わえるようにまねっこ歌遊び、歌いながら遊べるわらべうた遊び、音楽に合わせて体を動かすリズム遊び、表現遊びなどを積極的に取り入れるべきである。その際、個々の自由な表現意欲を伸ばすとともに他者を意識して互いに聴き合ったり協働したりできるように支援していく必要がある。

##### 2) 器楽

「低学年の児童は、楽器を演奏することが好きで、曲を楽しんで聴き、模倣して演奏しようとする傾

向が見られる。」(以下歌唱と同文のため省略)

「低学年の児童は、曲の雰囲気を楽しんで演奏しようとする傾向が見られる。」

「低学年の児童は、楽器自体やそれを演奏することに興味・関心を持ち、様々な楽器に触れて、いろいろな音を出すことを好む傾向が見られる。」

「低学年の児童は、模奏を楽しむ傾向が見られる。一方、リズムが不確かだったり、一定の速度を保てなかったりする傾向も見られる。」

「低学年の児童は、積極的に斉奏や合奏に取り組もうとする傾向が見られる。」

以上から器楽表現の活動においては、楽器そのものにも興味・関心を持ち、様々な楽器に触れていろいろな音色に親しみ、模倣しながら友達と一緒に楽しんで楽器を演奏しようとする児童の姿がわかる。歌唱と同様に実技面においてはリズムやテンポの維持は不確かであるが、積極的に取り組もうとする児童が一般的である。

学習指導要領の内容の取扱いと指導上の配慮事項には「各学年で取り上げる打楽器は、木琴、鉄琴、和楽器、諸外国に伝わる様々な楽器を含めて」、「第1学年及び第2学年で取り上げる旋律楽器は、オルガン、鍵盤ハーモニカなどの中から」いずれも児童や学校の実態を考慮して選択することとなっている。実際低学年では鈴、カスタネット、タンバリン、トライアングルといったいわゆる簡易リズム打楽器と鍵盤ハーモニカはほとんどの小学校でも扱われている。打楽器については「振る」「叩く」「打つ」など幼児期の楽器遊びに見られた動作が中心であるが、鍵盤ハーモニカは右手の指を鍵盤上で動かし同時に歌口を口でくわえて息を出し、舌でタンギングをするという、少々複雑な動作的操作を必要とする。また旋律楽器は音高や階名の理解と鍵盤上の指の位置や運指など様々な技能が要求される。そのため習得に個人差が生じやすく指導上の工夫が必要である。合奏することも楽しい活動であるが、全児童に一律同レベルの技能を身に付けさせることと音楽的発達を促す教育内容

には隔たりを感じる。個人差に対応しつつ一人ひとりが楽しく活動できるための教材開発も必要となろう。具体的な学習内容については教科書の内容の検討とともに後で触れる。また低学年に効果的な器楽の指導内容についても新たな楽器導入の提案とともに後述する。

### 3)音楽づくり

「低学年の児童は、音遊びの経験を通して、声や身の回りの様々な音に興味をもつようになり、自分が表したい音やフレーズを探したり、いろいろな表現を試したりする傾向が見られる。」

ここで言う音遊びとは、設定した条件に基づいて言葉を唱えたり、リズムを模倣して打ったり、声や身の回りの音や自分の体を使って出せる様々な音を見つけて表現する遊びなどである。普段の生活の中の様々な音に興味を持ち、その音が意味するイメージを持つような遊びは幼児期から経験していると思われ、そこからさらに音楽にしていって過程の面白さを経験できたらよいと考える。

### 4)鑑賞

「低学年の児童は、音や音楽に対する興味・関心が高まり、楽器の音色や人の声の特徴などに注目したり音楽に合わせて体を動かしたりしながら体全体で音楽を受け止めて聴こうとする傾向が見られる。」

また学習指導要領の内容の取扱い(3)鑑賞教材についてはア「我が国及び諸外国のわらべうたや遊びうた、行進曲や踊りの音楽など体を動かすことの快さを感じ取りやすい音楽、日常生活に関連して情景を思い浮かべやすい音楽など、色々な種類の曲」とある。

従って低学年の児童が興味・関心のある楽曲を選び、じっくり聴き入ったり体を動かしたりしながら体全体で音楽を受けとめてイメージを広げ、表現できる活動が好ましいと考える。また友達と互いに伝え合いながら共鳴、共振できるように導いていく必要もあろう。鑑賞の活動を通して、様々な音や多種多様な音楽と出会うことは感性を豊か

にし、柔軟な心と体を育む。

## 5)その他

指導計画の作成と内容の取扱い1(6)として「低学年においては、第1章総則の第2の4の(1)を踏まえ、他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにするとともに、幼稚園教育要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること。特に、小学校入学当初においては、生活科を中心とした合科的・関連的な指導や、弾力的な時間割の設定を行うなどの工夫をすること。」とある。音楽科の活動内容は幼児期から接続期につながるものが多く関連しており、生活に根ざした音遊びやわらべうた遊びをベースに展開できる可能性を含んでいる。

また同2(1)イ「音楽との一体感を味わい、想像力を働かせて音楽と関わるができるよう、指導のねらいに即して体を動かす活動を取り入れること。」とある。これは低学年に限らず全学年に言えることであり、解説では次のように記述されている。「児童が音楽を全体にわたって感じ取っていくためには、体のあらゆる感覚を使って音楽を捉えていくことが必要となる。児童が体全体で音楽を感じ取ることを通して、音楽科の学習において大切となる想像力が育まれていくのである。このように、児童が音楽との一体感を味わうことができるようにするためには、音楽に合わせて歩いたり、動作をしたりするなどの体を動かす活動を取り入れることが大切である。」

以上、音楽科の学習指導要領及び解説から、低学年の児童の発達上の特性に関する記述を抜粋し、好ましい音楽の活動内容や留意点について述べた。幼児期からの遊びをベースに低学年の児童は生活の中の身近な声や音に興味津々であり敏感に知覚感受していると思われる。そして模倣を通して身体全体で音楽を受け止めたものを直感的にとらえ自ら表現しようとする。その特性を踏まえて効果的な学習内容と指導法を考えていく必要がある。

## 2. 低学年音楽科の学習内容

では具体的な低学年の音楽科の指導内容及び指導法はどのようなになっているのだろうか。ここでは現在の小学校現場で主に使われている2種類の教科書及び指導書から検討していく。「小学生のおんがく1」「小学生の音楽2」(ともに教育芸術社、以下教芸とする)及び「おんがくのおくりもの1」「音楽のおくりもの2」(ともに教育出版、以下教出とする)の指導書(研究編)の年間指導計画を参考に、それぞれの題材構成と指導内容を以下にまとめた<sup>15-16)</sup>。(表1及び表2参照)

音楽科の実際の授業では共通事項を要として各領域や分野の関連を図って行われるため、題材のねらいによって歌唱から音楽づくりへつなげたり、鑑賞から器楽へ発展させたりする等、楽曲教材の扱い方も複雑である。両教科書とも1年生と2年生の題材が関連付けられ系統性を持っているが、教科書に出てくる順番は多少入れ替わっているため、表1・2では系統性を優先して題材の趣旨に沿って記した。また教科書にはそれぞれの題材に組み込まれている楽曲教材以外にも、幼児期からよく歌われてきたいわゆる童謡や季節の歌、オプショとして組み込まれている楽曲などが含まれているがこの表には含めていない。

教芸の低学年では、1年生と2年生共に8つの題材から構成されて系統性があり、それぞれの題材の主たる活動内容によって「歌唱を中心とした表現活動」「拍に関連したリズム表現活動」「器楽に関連する表現活動」「音楽づくりによる表現活動」「聴いて表現する活動」「総合的な表現活動」の6つに分類した。拍に関連したリズム表現活動で打楽器を扱い、階名の理解と結び付けて鍵盤ハーモニカを導入し題材の狙いとしても位置付けている。

一方教出では1年生は7題材、2年生は9題材あり、それぞれ対応しているものもあれば、2年生で新たに設置されているものもあり、活動内容よりも共通事項による指導内容の系統性が強い。また主



表1 教育芸術社「小学校のおんがく1」「小学生の音楽2」の内容一覧

内容の分類	《題材名》ねらいと主な内容(楽曲教材)	
	小学生のおんがく1	小学生の音楽2
歌唱を中心とした表現活動	1. 《うたでなかよしになろう》 友達と一緒に歌ったり体を動かしたりする楽しさを感じ取りながら、音楽への興味・関心を持つ。 ・うたでさんぽ(ちょうちょうなど) ・ぞうさんのさんぽ ・てとてであいさつ ・ひらいたひらいた(共)	1. 《うたでともだちのわをひろげよう》 友達と一緒に歌ったり体を動かしたりする楽しさを感じ取りながら、音楽への興味・関心を持つ。 ・メッセージ ・ロンドンばし／こいぬのビンゴ(鑑) ・かくれんぼ(共)
わらべうた遊び	7. 《にほんのうたをたのしもう》 友だちと一緒に歌ったり音楽に合わせて体を動かしたりして、日本に伝わるわらべうたの楽しさを感じ取る。 ・さんちゃんが／おおなみなみ(鑑) ・おちゃらかはい	7. 《日本のうたを楽しもう》 日本に伝わるわらべうたの楽しさやよさを感じ取りながら、聴いたり歌ったりする。 わらべうたの特徴を感じ取り、音を選んで伴奏の旋律をつくる。 ・ずいずいずっころばし／あんたがたどこさ(鑑) ・なべなべそこぬけ
拍に関連したリズム表現活動	2. 《はくをかんじてあそぼう》 音楽に合わせて体を動かしながら歌ったり聴いたりして、拍の流れを感じ取る。 ・さんぽ(鑑) ・なまえあそび ・かたつむり(共)	2. 《はくのみとまりをかんじとろう》 音楽に合わせて体を動かしながら歌ったり聴いたりして、拍のみとまりや拍子の違いを感じ取る。 ・はしのうえで ・たぬきのたいこ ・トルコこうしんきょく(鑑) ・かっこう ・メヌエット(鑑)
	3. 《はくをかんじてリズムをうとう》 歌ったり体を動かしたりしながら、拍の流れを感じ取る。リズムの違いに気付き、拍の流れを感じ取って簡単なリズムを演奏したり、リズムに合う言葉を選び組み合わせで表現したりする。 ・じゃんけんぽん(カスタネット) ・みんなであそぼう ・うみ(共) ・しろくまのジェンカ(鑑) ・ぶんぶんぶん(タンバリン) ・ことばでリズム(音)	4. 《ひょうしをかんじてリズムをうとう》 拍子を感じ取りながら、リズム伴奏にのってえたり演奏したりする。 リズム譜に親しみ、簡単なリズムを演奏したり、反復を活かしたリズムをつくったりする。 ・この空とぼう ・いるかはざんぶらこ ・山のボルカ ・おまつりの音楽
器楽に関連する表現活動	4. 《どれみでうたったりふいたりしよう》 階名で模唱や暗唱をしたり、まねっこ遊びをしたりして、階名に親しむ。 鍵盤ハーモニカの基本的な演奏の仕方を身に付けたり、きれいな音に気付いて聴いたりする。 ・みつばちのぼうけん(鑑) ・たのしくふこう ・どれみであいさつ ・どんぐりさんのおうち ・なかよし	3. 《音のたかさのちがいをかんじとろう》 音の高さの違いに気付き、声の出し方や発音を工夫して即興的な音遊びをしたり、楽器で旋律遊びをしたりする。 音の高さに気を付けながら、階名で模唱や暗唱をしたり、鍵盤楽器で演奏したりする。 ・かえるの音あそび(音) ・かえるのがっしょう ・ドレミのうた(鑑) ・ドレミであそぼ
聴いて表現する活動	5. 《ようすをおもいうかべよう》 楽曲の気分を感じ取りながら、想像豊かに聴いたり思いをもって表現したりする。 歌詞の表す様子や気持ちを想像して、楽曲の気分にあった表現を工夫して歌う。 ・おどるこねこ(鑑) ・ひのまる(共) ・はるなつあきふゆ	6. 《ようすをおもいうかべよう》 楽曲の気分を感じ取りながら、想像豊かに聴いたり思いをもって表現したりする。 歌詞の表す様子や気持ちを想像して、楽曲の気分にあった表現を工夫して歌う。 ・人形のゆめと目ざめ(鑑) ・小ぎつね ・夕やけこやけ(共) ・海とおひさま
音楽づくりによる表現活動	6. 《いろいろなおとをたのしもう》 身近な楽器の音色の特徴を感じ取り、演奏の仕方や楽器の音色に興味・関心をもって演奏したり音楽を創ったりする。 楽器の特徴的な音色を感じ取り、楽曲のよさやおもしろさに気付いて聴く。 ・シンコペーテツドクロック(鑑) ・きらきらぼし(鉄琴) ・おとさがし(トライアングル すず) ・ほしぞらのおんがく(音)	5. 《いろいろな音を楽しもう》 身近な楽器の音色の特徴を感じ取りながら音楽を聴いたり、音色の組合せを工夫しながら表現したりする。 楽器の音色の違いを感じ取り、演奏の仕方を工夫して選んだリズムで問いと答えを生かしながら音楽をつくる。 ・だがつきパーティー(鑑) ・かばちゃ ・がつきでおはなし(音ウッドブロックなど) ・虫のこえ(共)
総合的な表現活動	8. 《おとをあわせてたのしもう》 互いの歌声や楽器の音を聴きながら、気持ちを合わせて歌ったり演奏したりする。 楽器の響き合いに気付き、拍の流れやフレーズを感じ取りながら楽しんで聴く。 ・やまびこごっこ ・とんくるりんぱんくるりん ・こいぬのマーチ ・ラデツキーこうしんきょく(鑑)	8. 《音をあわせて楽しもう》 互いの歌声や楽器の音を聴きながら、気持ちを合わせて歌ったり演奏したりする。 楽器の響き合いや旋律の特徴に気付き、いろいろな音を合わせる楽しさを感じ取りながら聴く。 ・こうしんきょく(鑑) ・どこかで ・ぷっかりくじら ・こぐまの二月 ・はるがきた(共)

表2 教育出版社「おながくのおくりもの1」「音楽のおくりもの2」の内容一覧

内容の分類	《題材名》ねらいと主な内容(楽曲教材)	
	おながくのおくりもの1	音楽のおくりもの2
歌唱を中心とした表現活動	<p>1. 《おながくにあわせて》 曲に合わせて体を動かしながら、拍の流れや曲の気分を感じ取って楽しく歌ったり聴いたりする。わらべうた等に親しみながら、拍の流れに合わせて身振りや遊びを工夫して楽しむ。 歌詞が表している様子を想像しながら、体の動きや声の感じを工夫して歌う。 ・かもつれっしゃ ・かたつむり(共) ・サンダーバード 他(鑑) ・ひらいたひらいた(共) ・おちゃらか／なべなべ ・わらべうた(鑑)</p>	<p>1. 《音楽に合わせて》 曲に合わせて体などを動かしながら、拍の流れや反復するリズムなど、音楽を特徴付けている要素を聴き取ったり、曲の気分を感じ取ったりして聴く。 歌に合わせて声や表情、身振りなどを工夫して楽しむ。 ・ジェットインデデン(鑑) ・ちいさなはたけ</p> <p>5. 《歌うの大すき》 リズムにのって、明るい声ではずんで歌う。 曲に合う歌い方を工夫して歌う。 ・朝のリズム ・虫のこえ(共)</p>
拍に関連したリズム表現活動	<p>2. 《リズムとなかよし》 4分音符と4分休符、8分休符から成るリズムを感じながら、拍の流れにのって歌ったりリズム表現を楽しんだりする。拍の流れや反復するリズムを感じ取って、リズム表現を楽しむ。 ・ぶんぶんぶん ・たんとうんでリズムをつくろう(音)(タンプリン カスタネット すず) ・しろくまのジェンカ ・ジェンカ(鑑) ・わくわくキッチン</p>	<p>3. 《はくのながれとリズム》 拍の流れや言葉のリズムを意識して、歌やリズム打ちなどを楽しむ。 音符・休符について、歌やリズム遊びを通して理解する。拍の流れにのって、リズムアンサンブルを楽しむ。 ・どうぶつの歌(鑑) ・こいぬのビンゴ ・どうぶつラップであそぼう ・ぴょんぴょこロックンロール ・ことばのリズムであそぼう</p>
器楽に関連する表現活動	<p>3. 《どれみとなかよし》 ドレミで歌ったり体をうごかしたりして、音高の変化に気付き、階名に親しむ。旋律の流れや盛り上がり、フレーズを感じ取って歌う。 ・どれみのうた(鑑) ・どれみのキャンディー ・ひのまる(共) 〔こんにちはけんぱんハーモニカ〕 楽器の扱い方や演奏の仕方に慣れたり、ドレミファソの鍵盤の位置を理解したりする。 聴き合いながら、音遊びを楽しむ。</p>	<p>4. 《楽きでドレミ》 階名唱に慣れ、楽器で演奏して楽しむ。 ・ドレミでお話し ・かえるのがつしょう</p>
音楽づくりによる表現活動	<p>4. 《いいおとみつけて》 楽器の音に興味をもち、音の響きの面白さを感じ取る。いろいろな楽器で音の出し方を工夫して、お気に入りの音を見つける。 ・いろいろなおとをみつけよう(トライアングル おおだいこ シンバル)</p>	<p>6. 《いい音見つけて》 楽器の音色、リズムの繰り返しや変化を聴き取り、その面白さを感じ取りながら、音楽の表している様子を思い浮かべて聴く。 楽器の音色を聴き取り、歌詞のイメージに合う楽器を選択し、表現を工夫して演奏する。 ・ゆかいな時計(鑑) ・森のたんけんたい</p>
音楽の仕組み	<p>5. 《おとでよびかけっこ》 音の響きの面白さを感じ取りながら、音による呼びかけ合いを楽しむ。 楽器による呼びかけ合いの面白さを感じ取りながら聴いたり、楽器でリレー遊びをしたりして楽しむ。 ・がっきのおとでよびかけっこしてあそぼう ・こうしんきょく(鑑)</p>	<p>2. 《歌でよびかけっこ》 歌い方や強弱を工夫しながら、歌による呼びかけ合いを楽しむ。 ・山びこごっこ ・かくれんぼ(共)</p>
聴いて表現する活動	<p>6. 《ようすをおながくで》 音楽を形づくっている要素をもとに、情景を思い浮かべて聴いたり、イメージに合った表現を工夫したりする。拍の流れにのって体全体で音楽を感じ取り、情景を思い浮かべながら、音楽を聴いたり歌ったりする。 ・おどるこねこ(鑑) ・すずめがちゅん ・おもちゃのへいたい(鑑) ・おもちゃのチャチャチャ</p>	<p>8. 《ようすを音楽で》 楽器の音やリズムをとらえ、情景を想像しながら聴く。歌詞や曲の気分にあった表現を工夫する。 反復を生かし、速度や強弱を工夫して、情景を音楽で表す。 ・そりすべり(鑑) ・こぎつね ・汽車は走る ・しゅっぱつ(鑑)</p>
総合的な表現活動	<p>7. 《ききあってあわせて》 交互唱の面白さを感じ取りながら、友達と一緒に表現する喜びを味わう。 拍の流れや言葉のリズムの面白さを感じ取りながら、リズム表現を楽しむ。 ・もりのくまさん ・フルーツケーキ</p>	<p>9. 《みんなで合わせて》 拍の流れにのって、友達と声を合わせて歌ったり、体を動かして楽しむ。曲のリズムに合わせて、友達と声ゆ楽器を合わせて楽しむ。 1年間の学習を生かす。 ・ウンパッパ ・チャチャマンボ ・ティニックリング(鑑)</p>
我が国や諸外国の音楽		<p>7. 《おまつりの音楽》 曲の気分を感じ取って、生き生きと歌う。 いろいろな太鼓の音楽の特徴を感じ取って聴く。 ・村まつり ・日本のたいこ(鑑)</p>
その他	<p>《にっぽんのうた みんなのうた》 歌詞の表す情景を想像し、曲の気分を感じ取って歌う。 ・うみ(共)</p>	<p>《にっぽんの うたみんなのうた》 歌詞の表す情景を想像し、曲想を生かした表現を楽しむ。 ・夕やけこやけ(共) ・春がきた(共)</p>

題による題材構成の主要部分とそれぞれの学習内容の発展としてのオプション部分があり、各地域・学校の実態に即して適宜扱えるようになっている。特に器楽学習の取り扱いには違いが見られ、鍵盤ハーモニカについては題材としてではなく〔こんにちは けんばんハーモニカ〕として位置付けられている。これは低学年で取り上げる楽器は鍵盤ハーモニカに限定されているわけではなく、代わりにハーモニカやオルガンなども任意に選べることに配慮している。また〈にほんのうた みんなのうた〉も題材としてではなく共通教材として必ず取り扱うこととしている。

### 3. 低学年の特性と学習内容の考察

学習指導要領解説に見られた低学年の児童の特性に対して、教科書及び指導書の内容を照らし合わせながら考察していく。

#### 1) 歌唱を中心とした表現活動

低学年の児童に好ましい活動として、まずは友達と一緒に知っている歌を楽しく歌う喜びを味わうために幼児期の童謡や生活の中で馴染みのある曲を扱っている。その際「かもつ列車」のように動きながらジャンケンゲームをする遊びを取り入れた歌唱活動は有効である。また歌詞の内容にあったジェスチャーを取り入れて楽曲の雰囲気全体で感じ取って表現する活動が多く取り入れられている。共通教材の「ひらいたひらいた」だけでなくわらべうた遊びは低学年の常時活動としても意義があり、実際に歌い遊ぶことで他者との関わりが身体を通して自然と共振していき、協調性や社会性も育まれる。心を開放でき歌が身体に浸み込むことで替え歌などの発想を得たり、言葉遊びや音楽づくりへ展開する可能性を持っている。

#### 2) 拍に関連したリズム表現活動

歌う活動と合わせて拍に関連したリズム表現活動も多く行われている。「白くまジェンカ」の音楽に合わせて踊ったり手拍子を打ったり、「小犬

のビンゴ」で言葉のリズム遊びをしたり、3拍子と4拍子の違いを感じて体で表現したり、またリズム打楽器を導入して簡単なリズムを叩いたり、多様な活動が可能であり友達と一緒に楽しむことができる。低学年で導入されているリズム打楽器は前述の通り「振る」「叩く」「打つ」といった簡単な動作で演奏でき、色々な楽器の音色に触れてイメージを広げることでもある。

#### 3) 器楽に関連する表現活動

器楽の学習に向けては、まず階名(ドレミ)や音高を感じ取り体で表現しながら親しむ活動が取り入れられている。特に鍵盤ハーモニカの導入に欠かせない活動として、楽器への興味を生かしつつ音遊びを十分に経験させたいところである。鍵盤楽器は幼児教育においてもすでに取り扱われていたり、音楽教室などでも経験している子どもがいるが、小学校に入学して初めて経験する児童もいる。白鍵と黒鍵が並ぶ鍵盤から「ド」の位置を教え、「吹く」動作と同時に指を動かして「弾く」動作が同時に行われる。吹くという動作は風船を膨らませたりラッパのような玩具を吹いて鳴らしたり遊びの中で経験しているが、指を順次一本一本動かして鍵盤の一音一音に対応させて動かす動作は初めての場合が多い。さらに指くぐりや指またぎなど運指の問題もある故に技能習得には個人差が生じやすい。遊んでいるうちに自然と奏法を身に付けられるのであれば理想的だが、一般的に歌唱活動よりも器楽学習における技能面の習得における個人差は大きいと思われる。ここでつまずくと音楽の楽しさも失ってしまいかねなく、指導上の配慮が必要となる。鍵盤ハーモニカ導入における指導法については別稿で改めて論じたい。ここでは技能習得には動作性の課題について検討の余地があることを言及しておく。

#### 4) 音楽づくりによる表現活動

音楽づくりの活動は旋律遊びやリズム遊びの延長上で替え歌にして変形させたり即興的に行われるため、比較的小子どもが主体的に自由に活動でき



る。むしろ教師が子どもの素朴な表現をどれだけ受け止めることができるかが課題であろう。

#### 5) 聴いて表現する活動

鑑賞学習は単独ではなく、歌唱や音楽づくりなどに関連させて随時取り入れられている。児童が興味を持ちそうな動物や乗り物などになりきって踊りたくなるような教材が取り入れられている。「おどるこねこ」は正にニャーオと猫のように手招きしたくなる音形があり、声に出したり猫になりきって体を動かし楽曲の気分や情景を体全体で表現することができる。そこに変化を加えた遊び(例えば小さな猫と大きな猫、オスとメスの声の違いなど)を取り入れることでさらに感受が深まることもあろう。鑑賞教材に限らず、日ごろから様々な音に耳を傾け、そこから広がるイメージを広げ、興味を抱けるよう導く必要がある。

#### 6) 総合的な表現活動

1年間の学習の成果を生かした歌と合奏の活動をすることで互いを聴き合い、響き合いを感じることができる。みんなでまとまって心をつにしてお互いの達成する活動は学級運営としても学びが期待できる。そんな中で子どもがそれぞれの思いを持ちながら協働的な音楽経験をするには価値があると思われる。

以上、幼児期からの接続期である低学年の児童の音楽的発達の特徴を遊びと身体動作に着目して俯瞰すると、現状の音楽科の学習内容は歌唱、音楽づくり、鑑賞のほとんどにおいて遊びの要素や体を動かす活動が含まれていて、その中で十分に児童が心を開放して自己表現でき、楽しく協働的な音楽経験による学習成果が期待できる内容といえる。しかしながら器楽学習においてはその特異性もあり検討の余地が残る。とりわけ低学年での鍵盤ハーモニカについては奏法習得における複合的な動作と身体的コントロールが必要であり、導入法や指導法については再考する必要がある。

## 4. 器楽学習の現状と課題

### 1) 器楽学習の史的背景

低学年に位置付けられている器楽学習の現状を明らかにするために器楽教育の歴史的背景について簡単に触れておく。近代日本の学校音楽教育は明治の学制発布後、文部省に音楽取調掛が置かれ、西洋音楽の理論を取り入れて教材を開発しつつ発展してきた。幼児の音楽教育における唱歌や尋常小学校における文部省唱歌など唱歌中心の音楽教育から時代を経て、器楽教育は昭和の戦後になってから本格的に導入された。それは正に戦後復興期と重なり、楽器製作会社と音楽教育者によって様々な教育楽器が開発され発展してきた。

戦後の器楽学習の全体的な歴史的動向については中地に詳しい<sup>17)</sup>。1947年の学習指導要領音楽編(試案)では器楽が必修領域として捉えられ、翌年文部省は「合奏の本」を発行した。1951年改訂の小学校学習指導要領音楽科編(試案)では目標としてリズム楽器を使用する能力などの枠組みが作られ、准じて1953年には「小学校の合奏」を編纂された。1年生では現在使われているほとんどのリズム打楽器が示され、2年生で木琴、鉄琴、3年生でシンバル、ハーモニカ、4年生でたて笛、鍵盤楽器、オーケストラ楽器、高学年では弦楽器や管楽器が示された。しかし実際は楽器も十分にそろわないため学習も指導も成立しているといえる状況ではなかった。

1958年の改訂からは「試案」の文字が消え、法的拘束力を持つものとして義務化され、楽器の普及が促進された。器楽指導の実践研究も盛んに行われ、1～3年生にリズム楽器と木琴、鉄琴、ハーモニカ、オルガン、4年生ではアコーディオン、6年生で横笛が新たに加わった。中学校用器楽教科書も発行され、吹奏楽部の設立など課外の活動も始まり、楽器産業の発達とともに全国的な器楽教育の基盤ができた。

1968年の学習指導要領改訂に先立ち、「第1次教

材整備10か年計画」が策定され、ピアノやオルガンなどの楽器が全国の学校に整備された。ハーモニカと笛については個人所有が一般的となり、笛は3年生で示され、この頃は鍵盤ハーモニカの開発や改良も行われており、楽器が普及するに連れ器楽の楽曲教材も増え、指導内容も次第に音楽的に高度なものが要求され技能偏重の兆しが窺われる。

1977年の学習指導要領改訂と「第2次教材整備10か年計画」によって、電子楽器やアルト・テナー・バスリコーダー、ティンパニーなどや弦楽器、管楽器、和楽器も整備された。ハーモニカとオルガンの代用楽器として鍵盤ハーモニカや電子ピアノなどが可能とされ、低学年でもハーモニカに代わる鍵盤ハーモニカが個人所有として普及した。

1989年は平成が始まった年であるが、時代はグローバル化に向かい民族楽器の導入など、取り扱う楽器もさらに拡張していく。学習指導要領改訂により新しい学力観として音楽科でも即興表現や音楽づくりに関連した活動が展開され、コンピューター・ミュージックへと広がっていく。小学校ではアニメやポップス曲の教材も扱われるようになった。

1998年の改訂ではそれまで学年ごとに示されていた楽器の指定がなくなり、低学年は身近な楽器中学年以降の旋律楽器と打楽器として柔軟に選択することが可能となった。その後の改訂では楽器の取扱いに関しての変更はなく現在に至る。

嶋田は鍵盤ハーモニカ及び現在小学校中学年で導入され一人1台ずつ個人所有が定着しているリコーダーにつながるたて笛の導入の経過について、実社会の流れや教育現場の実態がよりわかる当時の教育雑誌や教科書から考察している<sup>18)</sup>。そこでは器楽教育が戦後の第1次学習指導要領(試案)とともに突然始まったわけではなく、当然ながらそれ以前から輸入されている楽器などを用いた器楽教育の先駆的な実践者たちがいて、その後の指針となったことを指摘している。また鍵盤ハーモニ

カについては、ヨーロッパの似た楽器が1960年初頭に日本に紹介されたことをきっかけに楽器業界が開発を始め、発売後に中学校の合奏クラブでの実践が検証され、ハーモニカの欠点を補い吹奏楽器と鍵盤楽器の良さを持ち合わせた楽器として評価を得た。当時はまだ価格も高く故障もしやすいため個人所有ではなく学校備品として各小中学校に何台かずつしかそろっていなかった。さらに鍵盤ハーモニカという名称で最初に教科書に記載されたのは1969年度用の中学校器楽用教科書であったことは興味深い。ある程度の肺活量と息のコントロールが必要な楽器であり、その後70年代に入って小学校高学年用の教科書に採用され、80年代には低学年にも代用楽器として普及した。

## 2) 鍵盤ハーモニカの指導内容について

山中は鍵盤ハーモニカの導入と指導内容について特に60年代から70年代に焦点化して述べている<sup>19)</sup>。1968年の学習指導要領には鍵盤ハーモニカの記載はないが、前述のとおり学校備品として導入されており、1970年の教育出版の教科書では4年生に指導内容が掲載されていた。そこでは4年生までに既習した鍵盤楽器としてのオルガンの奏法と吹奏楽器としてのリコーダーの奏法から発展させ、鍵盤ハーモニカでは同音の連打はタンギングを使用することに触れている。1976年の教科書では2年生に載せられており、1年生の指導書には鍵盤ハーモニカの楽器の特徴や奏法などが記載されていた。運指よりもタンギングを活かした奏法によって、今までオルガンやアコーディオンでは表現しきれなかった同音連打やアクセントのついたフレーズを比較的容易に表現できるようになることが示されている。教育現場では単にハーモニカやオルガンの代用楽器としての鍵盤ハーモニカではなく、鍵盤ハーモニカ独自の長所を前面に出し特性を生かした奏法を取り入れた音楽表現を低学年から習得させるだけの価値がある楽器として変化したことがわかる。器楽教育全体を見通した時、鍵盤ハーモニカの学習にはそれなりの教育的意義があるこ

とは確かだが、果たして鍵盤ハーモニカは低学年の児童の発達段階にあっていのだろうか。

鍵盤ハーモニカの具体的な指導内容や指導法を現行の学習指導要領や教科書等から分析・考察している先行研究もいくつかあるが<sup>20-22)</sup>、やはり位置付けのあいまいさや、運指とタンギングの指導内容も技能面での困難さにより、検討の余地を残す。前述したように、鍵盤ハーモニカを演奏するには「吹く」動作と指で「弾く」動作が一緒に行われる。加えてタンギングやフレーズの表現のためには舌や息のコントロールが必要であり、鍵盤楽器としての運指の難しさや、旋律を吹く際の読譜や階名と鍵盤の位置理解も含め、決して簡単なものではない。

低学年の目標である楽しく音楽に関わり音楽表現を楽しむには、音楽に合わせて体を動かしたりゲーム的な遊びを取り入れて歌ったりして、たとえば間違いがあっても失敗というよりむしろそのアクシデントを楽しみ、友達とのタイミングのずれを受け入れながら共鳴していくことができる。しかし器楽学習の場合は楽器を操作する技能面の指導に偏る危険性を孕み、奏法が難しいと技術習得の課題が常に付きまとい、「できた、できない」や「正しい、間違い」「上手、下手」などの認識から苦手意識を持つことも多い。そのような活動では子どもは技能面がある程度達成できないと本当の意味で楽しめてはいないはずである。教師もすべての児童が正しい奏法を習得できることを目指して指導にあたると、ある楽曲を一斉に鍵盤ハーモニカで演奏しようとするならば、かなりの個人差に対応しなくてはならないだろう。学習指導要領解説に記載されている低学年の児童の特性は一般的な児童の姿であり個人差については言及していない。しかし実際の教育現場では個々の能力差や適応力の違いから様々な課題があることは容易に想像できる。「できない」ことを時間かけて「できる」ようにすることももちろん教育的価値のあることであるが、表現の工夫や本来の楽しさを味わうこと

から乖離してしまっては元も子もない。

以上、器楽教育の変遷から低学年におけるリズム打楽器や鍵盤ハーモニカ導入の経緯をたどり現状を把握した。今後は子どもの発達に即した鍵盤ハーモニカの導入法や指導法を再考する必要があることがわかった。次章では、遊びにおける動作性に着目して低学年の音楽的発達を促すために有効と思われる旋律楽器や打楽器について触れていきたい。

## IV. 器楽学習に有効な楽器導入の提案と指導法の考察

これまでの低学年の児童の音楽的発達と身体的発達における動作性の特徴及び小学校における器楽学習の内容や取り扱われている楽器の現状を踏まえ、本章ではより発達段階にあった音楽的感性の育成につながる楽器導入の提案を行い、実践例を示しながら指導法の考察を加えたい。

### 1. トーンチャイム<sup>注8</sup>

まずは「振る」「打つ」といった腕を振ってハンマーを打つことで音が出るトーンチャイムである。これはミュージックベルやブームワッカーなど、



図3. トーンチャイム



一つの楽器から1音を出すいわゆる単音程楽器であり、児童一人ひとりが1音ずつ担当して演奏することで、必然的に協働的なアンサンブル活動となる。ミュージックベルは幼児教育などでも取り入れられ、音ごとに色がついて視覚的にも魅力的であり、比較的高い音域のきらびやかな音色であるのに対して、トーンチャイムは音域が広く、低音域の楽器は当然楽器も太く長く重くなり、とても暖かみのある優しく美しい音色の楽器である。1回鳴らすとかなり長い間音が持続されるが打音の強弱によっても違い、チャイムの振動を胸に当てて止めると音が消える。前述した幼児のミュージックベルでの事例のように、この持続音をじっと聴き音をつないでいく活動も良い耳を育てる一方法である。また和音の組み合わせで同時に豊かなハーモニーが鳴ると自然と「きれい」と一斉に口に出るほど美しさを共感できるであろう。

低学年の児童には楽器そのものの響きを存分に味わわせてから、簡単な演奏を経験させたい。既習の教材やよく知られている旋律でも良いが、音域や使用音のできるだけ少ないものから始めたい。その際音名プレートでの表示が英語音名のため、図3のように階名(ドレミ)や色表示するなどの工夫が必要である。またトーンチャイム用の楽譜教材も多数出ているが、まだ五線譜を読めない段階であることや、他の鍵盤ハーモニカなどの学習の進捗とも合わせながら、五線譜に代わる何らかの表示の工夫が必要である。

以下は教員養成の学生が作成した例である(図4)。「小さな世界」の旋律の階名音がプログラミングによってゲームのように色付きの記号として右側から流れてくる。ドは赤、レは黄色というようにトーンチャイム本体にも同じ色表示をしておく。横に流れてくる色表示の音が白い円と重なるタイミングに合わせて自分が担当している同じ色のチャイムを振って鳴らすと、音がつながり旋律として構成されていくのである。

ある程度子どもが演奏可能な時間設定でプログ

ラミングしておくが、そこに合わせようとするスリル感も楽しみながら音楽を感じることができる。実際は、小学校低学年の子どもたちにまず学生が見本を聴かせ、次に子どもと一緒に画面を見ながらタイミングを計って音を鳴らし、最終的に子どもだけでの演奏が成り立っていた。見ず知らずの人とお互いの音を聞き合い一つの音楽が完成した時には笑顔がこぼれ達成感があった。

図5は大きな模造紙に「かえるのうた」の旋律を色や絵音符で並べて表示したものである。この場合教師が一音ずつ鳴らすべき音を指し示しながら子どものペースに合わせて演奏することができる。慣れてくると、子どもが自分たちのペースで勝手に始め、旋律を歌いながらお互いを補い合い協力して演奏することができるようになる。さらに一人でチャイムを順番に持ち替えて演奏するなど、トーンチャイムの音色と旋律の流れを理解し感じながら演奏していた。山崎はこの単音楽器による教育的効果を次のように述べている。「一人1音という現実的には厳しい責任の下で行う行為であり(中略)個人の存在を全体で意識することになり、協力し助け合うことでしか曲の成立がないという、究極のアクティブラーニングでの教育効果という

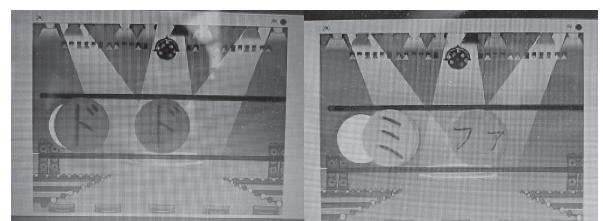


図4. プログラミングの視覚教材

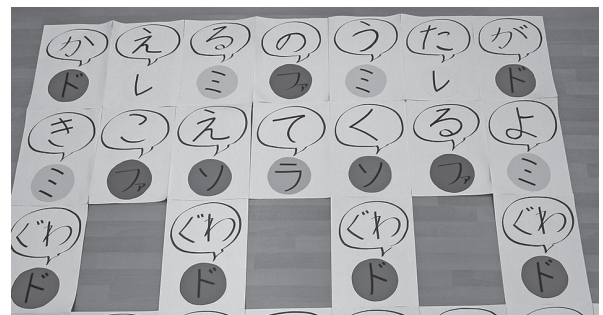


図5. 「かえるのうた」の色音符

ことができるのではなからうか<sup>23)</sup>。」トーンチャイムの他にも単音程楽器として幼児期からの楽器遊びに有効な楽器は前述のミュージックベルがあり、他にもブームワッカーや押したり踏んで音を出すミュージックパッド、吹くことで鳴らすクワイヤーホーンなどがある。

みんなで一斉に鍵盤ハーモニカやリコーダーを吹いたり打楽器を叩いたりすることも一体感を味わえるのだが、個人の演奏技能によっては全員が必ずしも音楽活動を楽しめているかは甚だ疑問である。この一人1音によるトーンチャイムアンサンブルは、演奏技能自体は誰もがができることであり、むしろ楽曲の成立を共同作業によって児童が主体的に行い、問題があれば解決するために色々と模索し、出来上がった時の達成感も味わえ、何より音や音楽に対する感性を育む活動といえよう。

このような活動を低学年から取り入れておくと、中高学年に向けて音を徐々に増やしたり、別の楽器の旋律と和音を組み合わせたり、音楽づくりに応用することもでき可能性が広がる。小学校現場にはまだ導入が少ないが、今後体験できる場を増やし普及させていきたい楽器である。

## 2. オルフの音板楽器<sup>注9</sup>

次は「叩く」動作で演奏できる木琴、鉄琴などの音板楽器の中でも、いわゆるオルフ楽器としての音板楽器である(図6)。オルフ楽器はカール・オルフがミュンヘンの楽器制作者とともに開発した共鳴箱つきの音板楽器(Stabspiel)に象徴される。その特徴は「子どものための音楽」の理念に沿ってまず13音の幹音からなり、音域によってソプラノ・アルト・テノール・バスに分かれている点、そして何より1音1音の音板が取り外せることである。このことにより、さらに必要な音のみに限定できたり、自由な音階を構成することができたりする。小学校にある一般的な木琴や鉄琴は音板がピアノのように派生音も含めて多数あり、旋律を

正しく演奏するには緊張の伴う楽器である。低学年の児童にとっては触る機会は少なく高学年でも一部の児童に限られるのではないだろうか。しかしオルフ楽器はどんな体型や筋力の子どもにとっても演奏しやすい楽器であり<sup>24)</sup>、音域ごと小分けになっているため何種類か置いておけば子どもが自由に叩いたり音板を取り外して遊ぶこともできる。幼児教育の現場でも楽器遊びの一環や表現活動に活用している所もあるが、音楽教育以外の保育士や教員にとってはまだ馴染みがない楽器かもしれない。音色は一般的な木琴よりも共鳴箱によって豊かに響き心地よい。楽器の音域によっても様々な音色が楽しめる。

オルフ自身の作曲の手法として、また音楽教育の手法としても挙げられるのがオスティナート(短いパターンを連続して反復すること)である。小学校学習指導要領では共通事項の音楽を形づくっている要素の中の音楽の仕組みである「反復」に関わってくる内容である。リズム遊びや言葉遊びの模倣から、同じパターンをずらして重ねるカノンへ、そしていくつかの異なるパターンを重ねていくオスティナートアンサンブルが可能となる。

幼児や低学年の児童には普段の生活の常時活動としてわらべうた遊びを取り入れているが、そこに例えばラとミの音から成るオスティナートを入れてあげるだけで、わらべうたのアンサンブルが可能になる。使わない音板を取り外して音を限定し、どの音を叩いても間違える心配をせずに自由

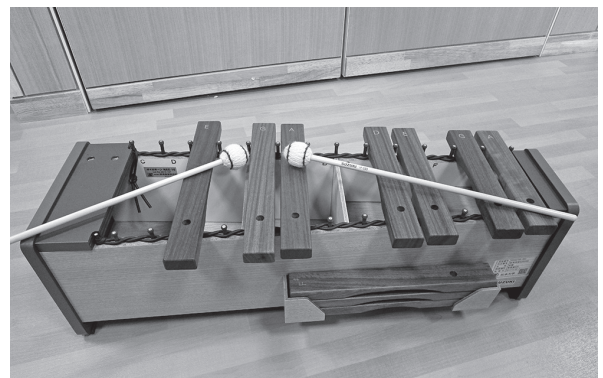


図6. オルフの音板楽器



なりズムや重ね方を反復することで取り組むことが可能になる。日本の子どものためのわらべうたでの応用教材や言葉遊びや詩を扱った作品<sup>注10</sup>などはよく教員養成や研修の場で実践が行われているが、小学校にも楽器の導入とともに取り入れられることが望ましいと考える。特に低学年ではわらべうたや言葉遊びと組み合わせ色々な音域の楽器遊びから感性を豊かにするものとして有効であり、そこから日本の5音階や沖縄の音階に応用していくこともできる。中高学年に向けてはお囃子の音楽づくりの活動に活用したり、リコーダーなどの楽器と組み合わせたアンサンブルの事例もあり<sup>25)</sup>、即興的・創造的な音楽づくりにおおいに活用したい楽器である。価格や諸事情によりなかなか小学校現場への導入は難しいのが現状だが、教員養成では学生に向けて実践しオルフ楽器ならではの活用と児童の音楽的発達を促す楽器として広げ、また教員研修でも体験してもらえる講座等でその意義を広めていきたい。

### 3. サウンドシェイプ&シェーカーなど

最後に打楽器の「叩く」「振る」動作はやはり低学年の児童の身体的発達に適している点から、慣例のリズム打楽器に加えて提案したいのがドラムサークルでも扱われるレモ社のサウンドシェイプと、シェーカーである(図7・8)。



図7. サウンドシェイプ

サウンドシェイプは様々な色と形があり、低学年の児童にとってはとても魅力的で、専用スティックで叩くと簡単に音が出せる。叩く強さによっても強弱の変化を表現することができる。しかも楽器によって音色も違うので、音遊びをしながら音高や音色、強弱の違いを感じ、手軽に演奏できるため様々なリズム活動やアンサンブルに活用できるであろう。

シェーカーは図8のようにフルーツシェーカーやエッグシェーカー等、様々な形のものがある。振ればシャカシャカと音がするという意味では、ペットボトルに様々な材料を入れた手作りマラカスもお手玉も有効であろう。とりわけエッグシェーカーは小さな低学年の子どもの手の平に丁度収まり直接音の振動を感じることができる。手拍子もいいのだが、このような楽器を一人1個ずつ手に持ちクラス全員で輪になると、楽器を同じタイミングで奏でたり、隣の人に渡していく活動等、全員で協働した活動を行うことができる。鈴やカスタネットよりも音量的にソフトで音楽に合わせて自由に振るもよし、リズムのまねっこ遊びをするもよし、全体で楽器の回し遊びをするもよし、とアイデア次第で楽しい音楽活動ができると思われる。

他にも児童が手軽に叩ける太鼓類やオーシャンドラムのような感性を刺激しイメージ広げることには役立つ楽器が多数あるため、学校教育の中での



図8. 様々なシェーカー



今後の活用が期待される。細田は幼児期の楽器遊びには音楽に合わせてリズムを叩いて合奏する「リズム打ち」が一般的だが、自由に表現する「イメージ打ち」遊びも重要だと述べている<sup>26)</sup>。雷の音や雨の音など幼児が絵本や遊びの中でイメージした音を様々な楽器で表現できる環境は、小学校に入るといつしか消えてしまう。低学年の音楽指導では遊びからイメージした自由な表現活動をつなげて発展させたいものである。

以上、低学年の児童の身体的発達における動作性に着目して「振る」「叩く」を中心として誰もが簡単に演奏でき、技能面の困難さを極力減らしつつも音楽的発達においては重要な聴く耳や知覚感受を促し、かつ楽しく協働的な音楽活動が可能となるような楽器を選定して活用法とともに述べた。

## V. まとめ

本稿では、低学年の音楽指導において身体的発達と音楽的発達の面からふさわしい学習内容の検討を行い、特に器楽学習における楽器の技能面の困難さの課題を踏まえて、より有用な楽器の提案と活動内容及び指導について考察を行った。

低学年の児童の発達を考える上では、人間がどのように音や音楽と関わって成長しているのかを出発点とし、乳幼児期の音遊びや楽器遊びが音楽的発達において重要であることを遊びの概念や遊びが学びにつながる先行研究の理論を基に論じた。そして音遊びや楽器遊びに伴う身体の動作性に着目し、発達段階の特性として「叩く」「振る」「押す」などの動作性を抽出した。

また幼児期から児童期の接続期においては無自覚な遊びから自覚的な学びへの移行期であることを踏まえ、新学習指導要領及び解説から低学年の児童の音楽的発達の特性を抜粋し、教科書及び指導書の指導内容から現状と課題を検討した。ここでは体を動かす活動を取り入れて音楽遊びをしたり友と歌う喜びや楽しさを味わい心を開放し音楽

を身体全体で受け止めて自由に表現する内容が中心であった。器楽学習についてはその特性から日本の学校教育における器楽学習の歴史や扱う楽器の変遷などについて改めて概観した。そこから現在低学年で導入されている鍵盤ハーモニカの動作性と演奏技能面にまつわる課題を挙げ指導内容や指導法についての再考の必要性にも触れた。

その上で、低学年の児童の音楽的発達により見合った学習経験ができるために有用と思われる楽器の提案と活用法について述べた。

様々な可能性がある中、限られた時間の中で何を組み込んでいくかは現実的に難しいが、教育環境、教師の力量や児童の現状を踏まえその効果を実証していくことが必要である。特に低学年の授業は音楽科専科だけではなく担任が行うことも多いため、今後教員養成と小学校現場が連携し、常時活動や音楽科とその他の教科の関連も視野に入れて提案した楽器を使った音楽学習の効果を実証していきたい。

## 注

- 注1 文献1)において竹内は、周産期医療分野で貢献した室岡一の研究発表に言及している。
- 注2 横浜版接続期カリキュラムで示された時期であるが、本論では低学年に拡大して考えている。
- 注3 横浜版接続期カリキュラム「育ちと学びをつなぐ」では幼児期は世界的には8歳頃までと捉えられていること、また年長児から低学年の児童の発達の特性の共通点として、対象との直接的・具体的な関わりを通して学ぶことを挙げている。
- 注4 K. Swanwick J. Tillman「The Sequence of Musical Development :A Children's Composition」(1986)は『音楽発達過程の系統性―子どもの作品の研究―』として坪能由紀子氏によって翻訳紹介された。
- 注5 ニュージーランド出身のクリストファー・スモール氏による造語であり、音楽を「作品」としてではなく「行為」や「活動」と捉えること。
- 注6 山田陽一編『音楽する身体』昭和堂、(2008)より
- 注7 表の(鑑)は鑑賞教材、(共)は歌唱共通教材、(音)は音楽づくりを示す。
- 注8 トーンチャイムは四半世紀ほど前に(株)スズキ楽器製作所が教育楽器として開発したものである。
- 注9 オルフ楽器については文献25の井口の記述に詳しい。現在日本では(株)スズキ楽器製作所がザイロホーン、メタルホーン、ミニグロッケンとして、こおろぎからはシロボックス、メタボックスなどがある。
- 注10 星野圭朗・井口太編著「子どものための音楽」Ⅰわらべうたと即興表現、Ⅱリズムの即興表現、Ⅲことばの即興表現 の他、谷川俊太郎詩・中地雅之曲「ことば・あそび・うた」(いずれも日本シヨット社)などが出版されている。

## 文献

- 1) 竹内貞一「子どもの発達と音楽」『子ども・子育て支援センター年報』、第4号・第5号合併号、pp.79-87(2014)。
- 2) 今川恭子監修『音楽を学ぶということ』教育芸術社、pp.13-16(2016)。
- 3) ホイジンガJ 高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』中央公論社、p.58(1973)。
- 4) 小川博久「遊び保育」萌文、p.46、p.57(2010)。
- 5) カイヨワL 清水幾太郎、霧生和夫訳『遊びと人間』岩波書店、p.12(1970)。
- 6) ビアジェJ 大伴茂訳『遊びの心理学』黎明書房、(1988)。
- 7) 小川博久「『遊び』の探求」生活ジャーナル、p.297(2001)。
- 8) 石出和也「遊びを導入した音楽学習活動―幼小接続への予備的研究―」『北海道教育大学紀要』教育科学編、第66巻2、pp.181-190(2016)。
- 9) 古川美枝子「音楽と環境(3)～子どもの音遊びから楽器表現へ～」『名古屋芸術大学研究紀要』

第34号、pp.269-277(2013)。

- 10) 村上康子「幼児の音遊びに見る音楽的表現の変容」『社団法人情報処理学会研究報告』、pp.113-117(2004)。
- 11) キース・スワンウィック、野波健彦、石井信夫、吉富功修、竹井成美、長島真人訳『音楽と心と教育』音楽之友社、p.84、p.96、p.118(1992)。
- 12) 岩手県立総合教育センター教育研究「幼稚園と小学校低学年における音楽的発達を促す指導・援助の在り方に関する研究」、(1999)。
- 13) お茶の水女子大学附属小学校「第77回教育実際指導研究会」(2015)。低学年教育を考える部会配布資料
- 14) 文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽編」東洋館出版社、pp.31-51(2018)。
- 15) 小原光一ほか監修「小学生のおんがく1」「小学生の音楽2」指導書実践編及び指導書研究編教育芸術社、(2015)。
- 16) 新実徳英監修「おんがくのおくりもの1」「音楽のおくりもの2」指導書指導編及び指導書研究編 教育出版、(2015)。
- 17) 中地雅之「戦後器楽教育の展開」『戦後音楽教育60年』開成出版、pp.75-88(2006)。
- 18) 嶋田由美「戦後の器楽教育の変遷―昭和期の「笛」と「鍵盤ハーモニカ」の扱いを中心として」『音楽教育実践ジャーナル』日本音楽教育学会、Vol.7 No.2、pp.15-25(2010)。
- 19) 山中和佳子「日本の学校紀要育における鍵盤ハーモニカの導入」『福岡教育大学紀要』第65号第5分冊、pp.17-24(2016)。
- 20) 木許隆「教育現場における「音楽科」の指導に対する一考察―小学校における鍵盤ハーモニカの導入法―」『埼玉純真短期大学研究論文集』第4号、pp.17-26(2011)。
- 21) 山本美紀、筒井はる香「初等教育における鍵盤ハーモニカ学習の役割」『奈良学園大学紀要』第5集、pp.163-172(2016)。
- 22) 奥田順也「小学校低学年を対象とする鍵盤ハーモニカの指導の今日的課題に関する一考察」『玉川大学芸術学部研究紀要』芸術研究8、pp.45-58(2016)。
- 23) 山崎正「教育楽器としての単音程楽器使用の有効性と表現力育成―の効果について」『教育実践報告誌第1巻』、pp.27-36(2017)。
- 24) 小島律子、澤田篤子編『音楽による表現の教育』晃洋書房、pp.226-227(1998)。
- 25) 日本オルフ音楽教育研究会「オルフ・シュールヴェルクの研究と実際」朝日出版社、(2015)。
- 26) 日本オルフ音楽教育研究会「音と動きの研究」44、pp.48-49(2016)。